

地域とのつながりを大切にし、生かす活動

2005 年度第 16 期派遣：久保 朱美

派 遣 先：アメリカ・カンザス州

現・勤務校：岩手県立水沢高等学校

1) カンザス州ショーニーミッション教育区のプログラム

カンザス州では、現在 6・2・4 制となっていて、高校 1 年生（フレッシュマン）は日本の中学 3 年生に相当する生徒達である。管内の公立小学校は 37 校、中学校は 7 校、高校は 5 校である。高校、小学校、中学校の順に始業時間がずらしてあり、高校の始業は 7 時 40 分。一日 7 時間、50 分授業で、放課は午後 2 時 40 分。私が受け持った日本語クラスは、ショーニーミッション教育区の特徴的プログラムの一つである Center for International Studies(以下 CIS) の科目の一つであった。このプログラムに参加する生徒は、毎日 2 時間の外国語(日本語の他に中国語とアラビア語がある。日本語選択者の場合、日本語を 2 時間学習する)と 1 時間のジオポリティクスという社会科目の 3 時間をセットで受講しなくてはならないことになっている。単なる語学学習にとどまらず、その文化背景・歴史も含めた学習を通して、より国際的な視野を持つ若者の育成を目的としているためである。岩手県からの REX 派遣及び高校生の「かけはし」海外研修と同時期に始まり、15 年ほど続いたプログラムである。5 年前までは独自の校舎があったそうだが、受講者の減少もあり、現在はショーニーミッションサウス高校内に移転し、サウス高校の特別プログラムという印象もある。2006 - 2007 年度の日本語受講者は 46 名、中国語 21 名、アラビア語 18 名であった。

2) Greater Kansas City における“日本”

派遣先は、ミズーリ州との州境に位置し、カンザスシティに隣接した地域である。地図を見ると、カンザスシティは、カンザス州、ミズーリ州にまたがった一つの市のように見える。実は全く異なる自治体だが、「Greater Kansas City」と称して州を越えた社会活動が多くなされている。日本に関係のある活動やイベントも同様であった。派遣前に「なぜ、カンザスで日本語なのか？」とは、日本人・アメリカ人を問わず、多くの人から受けた質問だったが、地理的にアメリカの中心に位置するこの地には、2004 年まで日本総領事館が

置かれており、中西部の在留日本人や日本関連企業・団体の中心になっていた。また、第二次大戦後にアーカンソー州にあった日系人キャンプからカリフォルニア方面に帰る途中、帰りきれなかった人々が多く留まったのも、この Greater Kansas City 周辺だったようだ。カンザス州立大学には、東アジア研究の学部、日本の文化、芸能、日本語に関わるコースがあり、JETプログラムに参加を希望する学生も多いと聞く。ミズーリ州カンザスシティには、アメリカ中西部で最大のアジア美術品所蔵を誇るネルソン・アトキンス美術館があり、日本美術のみの展示室もある。渡米前、多くのアメリカ人の方からは、「中西部は最もアメリカらしい所。古き良きアメリカが残っている所。」とよく言われた。暮らしてみるとその言葉を実感することが多くあった。しかし一方では、かなり以前から日本とのつながりを持っている土地柄でもあった。現在 Greater Kansas City にはおよそ 700 人の日本人が生活していると聞いたが、日本人が少ない割には、中西部日米協会、日本協議会 (Japan Council)、日本祭りや姉妹都市交流などが盛んに行われている。これは、歴史的な背景もさることながら、古き良きアメリカのスピリットに支えられ、日本人、日系人の諸先輩方、親日家の方々が日本文化普及や日本語教育に尽力されてきたからだと思う。

3) 派遣にあたって “外” に出る機会を作る

かねてより希望していた REX プログラムだったので、派遣が決まった時には有頂天になった。事前研修が始まり、新しい出会い、ユニークな講座や学生時代に戻ったような宿題や教育実習など新鮮なことばかりで楽しい毎日だった。しかし研修が進むにつれ、「自分は一体、日本のどんなことに興味を持っているのか、果たして自信を持って紹介できるものはあるのだろうか」という疑問が膨らんできた。考えれば考えるほど焦り、事前研修が終わり、派遣までの一ヶ月を利用して、無理やり頼み込んで華道の基本を超特急で教えていただいたりした。しかし、自信など持てるはずもなく、半ば “開き直り” もあって、最低限、これだけは心がけようと決めたことがあった。それは、(1)出来るだけ学校の外につながりを持つ、(2)頼まれたことは、必ず引き受けてベストを尽くす ということだった。肝心の “授業” に、直接関わることはなかったが、とにかく楽しく “授業” するには、基本となる毎日の生活を “楽しむ” ことが大切で、そのために学校と家の往復だけにならないような工夫が、自分には必要だと感じていた。その結果、Center for International Studies 独自の組織である PTSA (Parents, Teachers and Students Association) 主催行事への参加、クッキングクラスの開催、Japan Festival 企画委員会や Japan Council への

出席、日本語会話クラブ Niji Kaiwa への参加、日米協会主催の行事への参加など、忙しく過ごし、地域の方と知り合うチャンスも広がった。そして、それらが結果的には、“授業”や学校行事の企画・実行の際に多くの援助をいただくことにもつながっていったのである。

4) 様々な活動とサポート

CIS-PTSA

サウス高校全体とは別にある CIS プログラム独自の PTA 組織。プログラムで行われる様々な行事の準備やサポート、教科指導の支援や多くの活動に対する金銭的な支援、プログラムの宣伝活動、ビジティングティーチャーの生活立ち上げ、ニュースレター発行、イヤープック作成、学習会など、CIS プログラムをあらゆる面から支援している。特徴的なのは、PTSA の “ S ” の部分で、多くの活動の中で、保護者ばかりでなく生徒も積極的な役割を果たすことになっているという点である。多くのイベントは夜や週末、夏休み期間中に行われ、学校と地域を結ぶ活動の中心になっていた。私自身も、この PTSA の行事として、メンバーの助けを借りて日本料理教室を三回ほど実施した。また岩手からの“かけはし”交流事業で訪れた海外研修生達の世話やイベントの企画運営なども PTSA のお手伝いがなければ出来なかった。日本の学校での P T A は、学校主導のイメージが強いが、CIS-PTSA は、正反対で、教師もまた一員として活動に参加しているという感があつた。

Japan Festival (日本祭り) 企画委員会

Greater Kansas City Japan Festival 日本祭 では、数多くの日本文化紹介が行われるため、企画委員会に出ることで、いち早くそれらの情報を得ることが出来た。CIS プログラムの生徒達もボランティアとして参加し、多くの日本人の方と共同作業をすることで、日本語を話す機会を得たり、学校では体験できないステージ発表や武道のワークショップに参加したりして“日本”を楽しむ二日間を過ごした。

Japan Council (日本協議会)

日本に関連した団体のまとめ役 日本人会、日本語及び日本文化関連の教育機関、日本語補習校、姉妹都市協会(日本に姉妹都市を持つカンザスシティ近郊の各自治体の姉妹都市協会)、JET Alumni (JET プログラム経験者中西部支部)、日米協会、日系企業団体などの代表者が出席し、互いの活動について報告、情報交換を行う。CIS プログラムでの発表会や日本語コンテストの宣伝の他、一部団体には、日本語コンテスト運営にかかわって寄付を依頼し、支援してもらうことも出来た。

The Heart of America Japan- America Society (中西部日米協会)

ミズーリ州カンザスシティの姉妹都市(岡山県倉敷市)との交流事業推進、Greater Kansas City 日本祭りの企画・運営、高校生の日本への海外研修の支援、日本文化紹介イベントの企画、情報提供など多くの活動の中心となっている。協会会員は、日本人に限らず、日本文化や日本語に興味を持つアメリカ人が多く、中心となって活動している役員の多くがアメリカ人である。私自身は会員ではなかったが、イベントのボランティアをしたり、ゲストスピーカーとして日本の学校について講演を行ったりした。日本文化紹介に使える数多くの物品を所有しており、それらを借りて CIS のイベントを行った。

Niji-Kaiwa 日本語会話クラブ

JET プログラムを始め、仕事の都合で日本に住んだことがある人や、様々な理由で日本語学習に興味を持った人、さらにカンザスシティ周辺に住む日本人から構成されている日本語と英語で会話を楽しむクラブ。メンバーはその時によって流動的だが、週一回スターバックスでコーヒーを飲みながら日本に関係した様々な話題などを話し合い、日本語学習の情報交換なども行う。日本人にとっては英語のスピーキング練習の場となり、メンバーの中で互いに日本語あるいは英語を話す良い機会になっている。このクラブに参加することで、学校とは異なる形で日本語や文化を紹介する機会を得ただけでなく、私自身もカンザスについて多くのことを学んだ。

草月流華道教室

在米 50 年を超える日本人の先生と香港や東京などアジアの国で生活したことのあるアメリカ人の先生が二人で教えている。レッスンは隔週。一回のお稽古で、準備された花材を使って、二種類のお花を活ける。年一度、華展を開催。私自身、初心者として教室に通いだし、アメリカで日本の活け花を学び、日本を学ぶ良い機会を得た。また、高校の授業の中で活け花を紹介し、実際に生徒たちにも花を活けてもらったが、その際には剣山を貸していただいたり、花屋さんを紹介していただいたり、花材を選んでいただいたり、とお二人の先生にも随分助けていただいた。実際に「活ける」という活動を取り入れると、生徒は、言葉で説明したことや事前に見たビデオの内容をより深く理解するだけでなく、様々な発見をしたようだった。

この他にも、授業のアイデアや情報などは、学校の中や教員研修、インターネットばかりでなく、地域の活動に参加することで得ることが結構あった。特に、帰国直前に行った

日本語コンテストの準備、運営の際には、地域、つまり学校の外とのつながりがなければ出来ないことが、たくさんあった。また、上記の活動への参加がきっかけで、カンザス大学名誉教授のアンドリュー椿先生を CIS に招いて、狂言のワークショップをしていただくことも出来た。これは生徒達にとっても大変興味深いワークショップになったようだ。カンザス大学への進学をぼんやりと考えていたシニア（四年生）の中には、椿先生の狂言ワークショップを見てカンザス大への進学を決めた生徒もいた。

5) 最後に

私はいつも「自分は運の良い人間だ」と思っている。人間的にも教師としてもいつまでも未熟で、失礼なことをしたり、失敗が多かったりするにも関わらず、周囲の人に恵まれているため、いつも何とかなっている。極端に意地の悪い人に出会うことがないばかりか、親切な人に出会うことが多い。アメリカでの滞在中も家族や友人、生徒達、職場の先生方、近所のおばあさんにまでも助けてもらい、楽しく過ごすことができた。地域の活動に参加することで、実はさらに多くの助けてくれる人たちと出会い、日本の学校現場でも、なかなか出来ないような実践を行うことが出来たと思う。

帰国の少し前にシニア生徒の一人がジャーナリズムのクラスの宿題だからと言って、インタビューを申し込んできた。日本に帰ってから彼がまとめたレポートを Eメールで受け取った。問われるままにとりあえず話したのだが、改めて彼がまとめたレポートを読むと、「旅行するのは、人に会うため」と答えている箇所があった。今回のアメリカ滞在は、様々な人に出会うためのちょっと長い旅行だったのだと思う。